西原まちづくり情報紙

広報 あいあい

第70号
令和４年10月20日
発行：西原地域コミュニティ協議会
TEL/FAX：028-635-7139
西原地域コミュニティセンター内

西原地区 コロナ収束祈願 花火大会

第2回西原地区 花火大会行われる

8月20日、昨年に引き続き、第2回西原地区花火大会が行われた。昨年は、一条中・青葉学園の校庭から打ち上げたために、西原通りに人だかりができた反省から、今年は西原通りを車両通行止めとして、参加者の安全を確保した。

昨年は１００発（15分間）の花火を打ち上げたが、今年は地域の各団体、企業、個人の皆さんの協賛金のおかげで５６８発（30分間）。夜空のスクリーンに展開する、きらめく宝石のような輝きを、地域住民は大いに堪能した。

雨の中、準備や警備、後片付けに汗を流した花房交番の警察官、消防第2分団の団員、体協、子連、ＰＴＡの役員、そしてひと時の夢を演出してくれた花火師の皆さん、本当にありがとうございました。

＊主な内容＊

表紙／西原地区
コロナ収束祈願花火大会
2P／〈特集〉「あいあい」
70号に寄せて
3P／いきいきライフ
「六道地獄絵図絵解き」より

〈特集〉「あいあい」70号に寄せて

「あいあい」は、平成8年5月8日に創刊、主に地域の行事を中心に年に2～3回発行してきた。コロナ禍となり行事の中止が相次いだ66号からは、まちづくりにも注目し、今回、特別号を除き70号を迎えることができた。

これからも、西原地区の発展を支える礎として版を重ねていき、ひとりでも多くの人が「あいあい」を通して、地域づくりへの関心を高めてくれることを願っている。

地域の思いを紡ぐ情報紙

「あいあい」元編集委員　北澤則子

創刊号から第26号までは編集委員として、その後は一読者として、親しみと関心を抱き続けてきた。編集に参加した50号を経て、今、70号の節目を迎えた。発行し続けた関係者の皆さまに、心から敬意を表したい。

手元にあるすべての号を綴じ込んだファイル。パラパラと繰ってみる。手作りからパソコン編集となり、モノクロからオールカラーへ。シンボルマークも作られ、ワクワクするようなレイアウトに臨場感あふれる写真が並んでいる。物故者となってしまった方々の顔も懐かしく、恒例の行事も少しずつ変化していく。

「あいあい」は、西原地区の歩みを記録しつつ、その行間に、地域を支える人々、支えられる人々の思いを紡いできた。これからも、未来に向けて、愛され、必要とさせる情報紙であり続けるに違いない。

編集委員は辞めてしまったが、「アクセス」(注)というNPOを通じて、視覚障がい者に向けて「あいあい」の音声版を製作、必要な人に届けている。今後も、音の製作者として地域に関わっていきたいと願っている。

(注)「アクセス」は、西原コミセンを拠点に活動するNPOで、「デイジー全文訳センターアクセス」の略称。行政情報などの音声版製作事業のほか、創刊号から一「あいあい」を全文訳し、CDにして届けている。ご利用になりたい方は、コミセン事務局までお問合せください。

★敬老の日を迎えて

●100歳敬老者

花房にお住まいの相良脩一さんは、百歳を迎えた。コロナ禍で今年も敬老会が中止のために社会福祉協議会会長、福田浩二さんが自宅を訪問して賞状と生花が贈呈された。

脩一さんは、百歳を記念して眼鏡スタンドを100個作り、地域の人たちに使って欲しいと西原コミセンに寄付した。希望の方は、コミセンまで連絡をしてから、お越し下さい。

#相良さんは、"古を訪ねて"のコーナーでも紹介しています。

●新敬老者を代表して

菊水町　中澤　孝義

私は昭和22年生まれ。万年22歳の気持ちでいるので、孫に年を聞かれても『22歳だよ』と答えていましたが、今回、誕生日を迎えたのを機に『本当はもう75歳だよ』と答えようと思います。

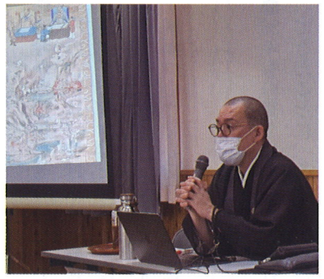
でも、気持ちは若く、体力維持に散歩、好きなカラオケや韓国映画等を楽しみながら、この地域でお世話になった方々に感謝し、私なりに出来る範囲でできることを精一杯行っていきたいと思います。

人生100年時代、75歳、まだまだです。

皆さんと一緒にガンバリましょう。

●〈いきいきライフ〉より「六道地獄絵図絵解き」

今年度の「いきいきライフ」は、コロナ対応で、7月から12月まで回数を5回に減らして実施。3回目の9月14日は、「六道地獄絵図絵解き」と題した、光琳寺住職の井上公法さんによる死後の世界の話。閻魔大王像と地獄絵のスライドと共に、話を聞いた。毎年8月16日に行われてきたご開帳だが、閻魔堂は来年にかけて改築されるそうだ。地獄絵はどれもリアル、分かり易く興味深い話だったので、概要を紹介する。



奪衣婆（スライドより）

人は死んだらどこへ行くのか。仏教では、長い暗闇のトンネルを抜け死出の山を越えると三途の川の岸に出る。ここで奪衣婆（だつえば）に着衣をはぎ取られ、衣（罪）の重さにより三途の川の渡り方が決まる。さらに死後49日までに、7日毎に閻魔大王ら十人の王の審判を受け「六道」の、どの世界に転生するが決まるという。

「六道」とは、修羅道（怒りの阿修羅の世界）餓鬼道（食べ物を口にすることができない世界）地獄道（罪をつぐなう世界）畜生道（動物や虫が住む世界）人間道（仏になることもできる世界）天道（長寿で平和だが迷いの世界）の六つである。

この中の地獄道は、生前の犯した罪の種類によって、血の池地獄、釜茹で地獄など、細かく行き先が分かれており、どの地獄も死ぬことができずに苦しみを永久に味わい続ける無間地獄だ。

昔から、交叉点や境界は「異界」との分かれ道と言われてきた。「六道」の言われもその一つだそうだ。

古（いにしえ）を訪ねて

「戦友に思いを馳せて」

花房本町　相良脩一さん

「長生きできて幸せです。」と話すのは、大正11年5月1日生まれの相良脩一さん、100歳。旧日本海軍の重巡洋艦「摩耶」（204メートル）の乗組員だった。1944年10月「摩耶」は、太平洋戦争でフィリピン、パラワン島に向かう途中、レイテ沖海戦でアメリカ軍に撃沈された。昨年、その沈没した船体がフィリピン沖で発見されたニュースは耳に新しい。

脩一さんもその「摩耶」に乗ることになっていたが、出港の前の5日間の休暇で宇都宮の実家に帰省した折、高熱を出して花房の滝澤病院に入院したが熱は下がらず、横須賀の病院に再入院することとなった。それが功を奏して「摩耶」に乗船することなく、生死を分けた。

戦後78年が経つが戦死した戦友たちのことを思わない日は1日たりともない。昨年、念願だった靖国神社に行き、戦友たちを偲んだ。感無量だったという。

100歳の記念に作成を始めた眼鏡スタンドは、廃材の段ボールを使い、内側はメガネを傷つけないようにフエルト、外側にはシックな柄の包装紙を貼る作業はとても手間のかかるものだ。主治医からも「手先を使うことは脳みそにいいです。」と褒められたと嬉しそうに話す。

年齢を重ねるほどに生きていることへの感謝と他者を思う心根が、健康な身体を維持してきた原動力なのだろう。妻の邦子さんと2人3脚の日々だが、地域の人に見守られていることをとても心強く思っている。

あいあいサイト

●西原セミナー

コロナ禍で西原セミナーも三年振りの開催となり、受講者も激減した中で、計5回の講座を計画した。第1回目は、夏休み中なので、親子で楽しめる講座を企画し、足利の藍絽座の風間先生をお招きして「藍染体験（大判ハンカチ）」を行った。

それぞれ思い思いに、布を織り込んだり、ゴムで縛ったりして染料につけていく。どんな柄になるか、開くまでわからない不安と期待感にどきどきしたが、全員が非常に満足いく結果だったようだ。親子での会話が弾み、参加者はとても楽しんでいた。

□今後の行事予定

体育祭・防災訓練・地域ＰＴＡ文化祭は、中止となります。

・どんど焼き
令和5年1月15日

・ふれあい福祉まつり
令和5年1月29日

「あいあい」編集者の声

●創刊から「あいあい」に関わってきた。回覧で全戸に配布しているので、およそ半分以上の所帯は読んでくれているだろう。まちづくりを担っている誇りと責任でこれからも頑張っていく!!（増渕）

●41号から携わり70号を迎えた。編集に全く無縁の私だったが今は「聞いて、伝える」ことの重責にやりがいを感じる。スタッフと気力、体力が続く限り地域の情報発信に努めたい。（大河原）

●56号から参加させていただいている。私の役割は、受け取った取材原稿と画像、割付け案を、ＰＣ上に再現すること。書き手と読み手の心に残る紙面づくりを心掛けたい。（加藤）

●26年もの長きにわたって発行し続けてきたことに、改めて驚きと敬意の念を感じます。これからも地域の情報の発信源として力を尽くしたいと思います。（岩本）

●趣味ゆうゆう

「刺し子・手染め」荒木隆夫（花房2丁目）

コロナ禍でみこし祭りが中止のままです。
染め、刺繍（刺し子）、縫製、すべて手作り！
手製のみこしグッズで
お祭り気分を味わってください。